

黄色い花

オディロン・ルドンに

日詰明男

あるところに小さくて愛らしい草が丘一面に青々と茂っていました。夏のはじめ、その草は一斉に黄色い花を咲かせます。

およそすべての生きものがそうするように、この草たちも独自の言葉で話すことができました。今彼らはみな小さなつぼみを付けています。彼らの話に耳を傾けてみましょう。

「ぼくたちは、なんてきれいなんだろう。」

「ほんとうに。」

「神さまも私たちのような黄色い花の姿をしているそうよ。」

「むかし有名な画家が描いた絵のようにね。」

「向こうにブナの森が見えるだろ。ブナはどうしてあんなに大きくなるのかな。足もとの日当たりが悪くなるだけだし、じめじめして不潔だよな。」

「このまえの嵐で、自分の重さに耐えきれず、倒れて死んでしまったブナがいたそうだよ。生き残ったブナも無傷でいられず、たいてい腕が2、3本は折れていたそうだ。」

「その点、ぼくたちはどんなに風が強くても身をまかせてそよいでいればいいのだから賢いよね。必要以上に大きくなってもいいことはないよ。」

「風の噂ではブナの森の大半が、新入りの宿り木におそわれて死にかけているそうだ。つい百年ほど前から。なのにブナはいまだに何も手を打っていないらしい。どうして怒らないのだろう。」

「死ぬのが怖くないのかな？」

「彼らは絶滅する運命なのかもしれない。ぼくたちにはどうしてやることもできない。」

「宿り木は宿主を殺すこともいとわないからね。目先の欲しか考えず、それが自殺行為だということがわからないんだ。」

「宿り木を追い払う毒を発明すればいいのに。ブナの体内には材料がひとつおり揃っているはずだから、その気になれば作れるだろう。ぼくならただちに反撃する。ぼけっとしている暇などない。」

「果たして暇なのかどうか。どうもブナたちはひっきりなしにおしゃべりをしているようだ。何を言っているのかぼくにはさっぱり分からないけど。」

「きみも気づいていたかい。ぼくもずっと前から聞こえていて気になっていたんだ。」

「あのブナの森から響く不思議な音色のことね。今もほら聞こえる。でもあれが言葉といえるものなのかしら。」

「あれだけ体の器官が発達しているのだから、言葉を使わないわけではないよ。」

「ひょっとしたら彼らはぼくたちと価値観が違うだけで、実はかなり賢い生きものなのかもしれない。」

「そうだね、ぼくたちよりはるかに歳をとっているようだし、言葉のかたちがちがうだけなのかもしれない」

「それはそうと、次に花を咲かせるまであとひと月だよ。準備はできているかい。」

「もちろんさ。一年に一度のお祭りだもの。」

黄色い花の社会では、ずいぶん前から深刻な問題がもちあがっていました。

毎年、花の咲く季節になると、仲間が大勢、まるで神隠しにあったように、突然いなくなってしまうのです。

何の前触れもなく、ついさっきまでおしゃべりをしていた仲間がふっとゆくえをくらますのです。そして二度と帰ってきませんでした。

それがいつ自分の身に降りかかるかと、誰もが内心気が気ではありませんでした。

ところでみなさんは木や草が毎晩星を見ていることを知っていますか？

動物で星を見ることができるのは鳥と人間だけだと言われています。他の動物は星を見る必要がないので星が見えません。

しかし星の中でも太陽は別です。太陽がすべての動物に目という器官を作りました。目は地上に作られた太陽の似姿なのです。ですからすべての動物は、太陽を直視できないものの、太陽が照らすものを見ることができるのです。

月と生き物の興味深い関係については、長くなるのでまた別の時にお話ししましょう。

太陽が目を作ったのと全く同じように、星星が花を作りました。それは気の遠くなるほどむかしのこと、気の遠くなるほど長い間、木や草は花を付けずにいました。ちょうど地球が所属する銀河の閃光が、宇宙の裏側をぐるっとまわって（みなさんは宇宙が丸いことをもうご存知ですよ）再び地上に降りそそいだとき、かの「原初の花」が誕生したと創世神話に書かれています。だから花は星の形をしているとも言い伝えられています。

というわけで、鳥や人間とはちょっと方法が違いますが、木や草もはっきりと星座を観察しているのです。むしろ動物よりもその観察力は的確かもしれません。

私たちは時計の短い針をずっとは見えていられませんよね。すぐにつまらなくなって、どこかへ遊びに行きたくなります。

ところが木や草は、ゆっくりと動くものを見るのがとっても好きだし、得意なのです。だから

彼らとはとりわけ星とは波長が合い、星について私たちよりよく知っているのです。

そのかわり普通の木や草は、すばやく動く虫や動物を見るのが苦手です。

でも例外はあります。人間に賢人がいるように、草木の中にもうすうす昆虫や動物の存在に気づいている種類もいます。いくつかの草木は動物を幽霊だと本気で思っているかもしれません。

この物語の主人公である黄色い花は、残念ながらまだ昆虫や動物の気配さえ知りませんでした。彼らは地上の生きものの中で、自分たちこそ進化の頂点にいると考えていました。

そしてひと月がたちました。日が暮れて、満月がのぼると草たちは可憐な黄色い花をいっせいに咲かせ、丘を月と同じ色で埋め尽くしました。去年よりも花の数はかなり増えたようです。

どの花もできる限りの背伸びをし、小さなパラボラアンテナのような花弁を天空へ向けていっぱいに広げ、一個の光子も逃すまいと立ちあがっていました。

彼らはいつもよりいっそう華やかでおしゃべりに興じ、それぞれが観測した出来事を互いに交換し合います。あたりは黄色い花の話し声が放つ甘い香りで満たされています。

ひとつの黄色い花がこう切り出します。

「それにしても空には星がいっぱいあるねえ。今夜は月が明るすぎて見えない星もあるけれど。ぼくたちとどちらがいっぱいかなあ。」

「そりゃ星の方が多きにきまっているさ。地面の砂の数とならいい勝負かもね。あの星星はみんな太陽と同じような星で、自分の力で光っているそうだ。そしてそれぞれその周りを地球のような惑星がいくつも回っているというよ。」

「その中にぼくたちのようなきれいな花が住む惑星があるのかなあ。」

「いるんだったら会ってみたいね。はたして同じ姿をしているのかな。」

「ぼくたちがここまで進化してきた事は、奇蹟の連続だから、ほとんどありえないことのように思うね。」

「いや、その奇蹟をすべて掛け合わせても余りあるほどたくさんの星がある。」

「いたとしてもだいいち言葉が通じるとは限らないよ。ブナが何を考えているのかさえ、ぼくらには分からないじゃないか。」

「たしかにブナの考えていることはわからない。苔や宿り木の行動はとてもよくわかるのだけれど。」

「でもたとえどこかの星に、わたしたちのように進化した花があって、言葉が通じたとしても、考えてごらんさ、光の速度でさえ星まで何十年も何百年もかかるのよ。会えっこない。だからそんなこと考えるだけ時間のむだよ。コンタクトできないものは存在しないも同然ということ。結局わたしたちは孤独な存在なのよ。」

「ワープすれば短時間で行けるよ。」

「あんた SF の読みすぎ。」

ところで、ブナの森では枝葉がまるで網膜のように生い茂り、満月の光に照らされてぼおっと青白く輝く梢の下は、漆黒の宇宙を思わせる闇を抱え、たとえようもない沈黙の雑音を発し続けていました。聞こえないようで聞こえ、聞こえるようで聞こえない耳鳴りのような金属音。

実はその闇では、人知れずすべてが観察され記憶されていました。まるでその森全体が巨大な眼球と化したように。

地面で日夜働く虫たちが、キノコなどの食料に不足してはいないか、水は十分ゆきわたっているかと、ブナの森は絶えず気づかっていた。とりわけ枝から枝へと飛び交い、歌を歌いながら子育てに励む鳥たちを眺めるのが、ブナにとってなによりの楽しみでした。

ブナたちは、毎年この季節、あの丘に黄色い花が咲き乱れると、きまって人間のこどもたちがそぞろお花畑に集まり、黄色い花を摘んで首飾りや冠をこしらえているのを見ました。

十年ほど前の日照りで、黄色い花があわや全滅しかけたとき、花に貴重な水をやり、黄色い花の命をつないだ人がいたことを、ブナたちはよくおぼえていました。

そんなことがあったとはつゆ知らず、好き勝手におしゃべりをしている黄色い花たちを、ブナはほほえましく眺めていました。

何百年も前のこと、ある穏やかな秋の日、黄色い花の種が一粒、高い空から風に乗ってふわふわと丘に舞い降りた時のことも、ブナは昨日のこのようにおぼえていました。

ブナの森が見ていたのはそのような事ばかりではありません。

実はブナは私たちより、はるかにいろいろなことを知っていました。

ブナたちはブナ自身より成熟した知性を持った生きものが地上にたくさん活動していることをずっと前から知っていました。

そしてこの地球が巨大な一つの「考える生きもの」であることを彼らは当たり前のように理解していました。

そして太陽や、その仲間の星星は皆、地球さえも及ばぬほど高度な知性であることを。

ブナはそれらを星星からとうの昔にうち明けられ、語り継いでいたのです。

だからブナたちは、何が起ころうと動じず、星の光と交わり語り合い、孤独を感じることもないのです。

おわり

2001年9月